

フィールド調査の始め方！ ～実践的調査方法について～

建築都市研究室 K2 角本 邦久

要約：今回、「フィールド調査の始め方！」に関して報告する内容は、専門課程における卒業研究としての総合制作実習での取り組み、日本建築学会における取り組み、市民フォーラムとしての東京雑学大学での講演発表等の発表内容（rf. 文献3. 参照）をもとに、能力開発現場での一つの方法論として役立てて頂きたいの思いから、これまでの実践内容を紹介させて頂くものである。個々の詳しい内容に関しては、末尾に紹介されている各参考文献（rf. 文献1～2 & 4～8. 参照）を更に参照願いたい。

SUMMARY: This report is based on the following items, namely the survey of the historical architecture, the old private house, and the temporary house after the wearing damage by the disaster in East Japan in 2011. These examples are shown here as the practical methods for the ability development in the field of survey in each local area. This report on the survey in each local area has been already introduced in the forum for the citizens also. The method of the survey can be utilized in the case of your local area to see the historical background there.

ZUSAMMENFASSUNG: Dieser Bericht ist über den folgenden Artikel beschrieben worden, und zwar die historische alte Architektur, das alte private Haus und die Untersuchung über dem provisorischen Aufbau nach der großen Erdbebenkatastrophe in Ost Japan in 2011. Diese Beispiele sind für die Entwicklung der Fähigkeit für die Praktikanten beschrieben worden. Dieser Bericht war im Forum für den Bürger vorgestellt und gut darüber informiert worden. Diese Methode kann für die Entwicklung der Begabung sehr zweckmäßig sein. Diese Methode der Untersuchung kann auf die Forschung in jedem Ort gut angewandt werden.

1. フィールド調査の意義付け

日本におけるものづくり教育のための教育課程においては、大きな社会的使命が期待されている。昨今におけるものづくりは、その付加価値を付与して行く方向性であり、単なる効率的生産性向上にはとどまらない。

私たちの生活空間を構成する要素の中には、街があり、建築があり、住宅がある。それらの構成要素

を四原因的に捉えて見るならば、技術としての作用因と材料としての質料因と概念としての形相因と建築物としての目的因とから成り立っていると考えられる。それらの複合された組み合わせである。

フィールド調査（rf. 文献1. 参照）と言う一つの方法論によって、その対象に対して調査を試みる事は、そこに一つの知見を得る事に繋がると捉えられる。それは、次のものづくり段階への根拠を得る業であり、教育技法へのスキルの一つであると捉えている。

2. フィールド調査の目的

フィールド調査によって得られるものは、そこに構成される要素ごとの関係性であり、そこから浮かび上がって来るところの概念としての形相の発見である。それは歴史の中で育まれて来たものであり、その表現方法は異なっても、次の時代へと継承されるべき内容のものであると考えられる。

3. フィールド調査の方法論

3.1 フィールド調査の始め方

初めにその手順について説明を加える。

1. 最初に、テーマを考える（歴史的な意義や社会的な意義や未踏のもの等…を選定する）
↓
2. 幾つかヒアリングや問い合わせをして、その分野の様子を知る
↓
3. 自分の興味あるテーマに関する文献検索を行う（その切り口や構成方法などを理解する）
↓
4. いよいよ対象物件を絞る（先方の調査実施条件やその時の卒研生の力量等も考慮に入れる、その他の条件についても正しく受け止める）
↓
5. この際に、興味のレベルのみならず、調査参加者の力量やまとめまでの持ち時間等も考慮に入れる
↓
6. 先方の打合せ窓口のキーマンを知る（調査協力を依頼する）
↓
7. 最後の成果物を意識して、必要な道具の準備や工程表の作成をする
↓
8. 調査の実施（項目ごとの調査条件をはずさない様に留意する、特に環境測定の場合には測定条件が大切である）

- ↓
9. 調査実施後のデータのまとめを速やかに行う

- ↓
10. 成果物（図面・写真・報告書・小論文など）の確認

- ↓
11. 関係先との連絡を取る

- ↓
12. 発表会等への参加

- ↓
13. 必要に応じて、伝達研修なども行う（次年度へのつなぎ）

3.2 手順ごとの説明

歴史的な建造物の調査に関しては、その文化的な意義から、世界に二つとはない対象物でもあり、調査方法や調査内容の制限などもあるが、後世に概念性としての形相因の働きと意味づけを残す観点からも取り組んで欲しいと考える次第。

1. のテーマの方向性を打ち合わせする。建築空間を成り立たせている四要素があり、概念としての形相因、材料としての質料因、技術としての作用因、建物としての目的因がある。歴史的な概念は、この形相因に含まれる。専門課程の学生さんの場合には、その専門分野で、どんな内容に興味を持っているのかを聞いてあげる事も有効な手立ての一つであると考え。

次に2. のヒアリングをするが、この場合の最初の問い合わせ窓口は、行政庁の教育委員会や文化課である場合が多い。

建物の保存状態やその所有者、或いはこちらの調査がどの程度まで可能であるかと言う点も大切な点である。この所有者の条件で、所有者の方が管理を行政側に移管している場合があるが、こちらの方が調査許可を行政の方が代行して下さるので、調査許可を頂くのが比較的によく進んだとの印象がある。

合掌造りの場合には、最初に実際のオーナーの方に手紙を書いて、現地の教育委員会との連絡を指示され、連絡を取り、一定の理解が得られて、その後、改めてオーナーさんに実測調査への協力をお願いし

て、調査条件を確認しながら、最終的な了解を得る事が出来た。

民家調査の場合には、施設からの協力依頼の文書を出すと言う条件付きで許可されて、図面資料の入手、現地での調査実測なども条件付きで許可された。

次に、3. のテーマに関連する文献検索であるが、これは必ず実施する必要がある。調査や研究は、オリジナリティーが求められる。今までの調査例に理解を示すと共に、新たな知見を得るべく、良く考え抜かれた方法で、対象と向き合う必要がある。

実測調査に関する事前の文献検索の意義は、①既に行われている内容の調査は追試の意味に留まる事。②出来れば、オリジナリティーを求めたい。③文献を読む事は、参加する実習生にとっても勉強になり、readiness向上となる。④全体の組み立て方を参考にし、最後の小論文作成に活かせる。⑤参考文献としても役立つ。

そして、4. の調査対象を絞る。これは栃木の蔵造での話であるが、美術館は空調設備の条件から、我々が望む空調なしでの測定が難しいとの回答があった。もう一つの郷土資料館の方は、空調を一時的に止める事も出来るとの事で、こちらを調査させて頂いた。調査に際しては、先方との約束は必ず守る事。互いの信頼関係を保つ事が大切である。調査は、色々な条件がある中での行為なので、こうした付帯条件が付いて回る。

次に、5. の力量の点であるが、専門課程の学生さんの場合に、このreadiness状態が整っていない、或いは不十分である事が考えられる。その場合には、こちらでフォローする事や、途中で補足の勉強会を追加する事も有効な手立ての一つで有る。実測調査の内容や調査レベルは、飽く迄も参加者の力量に適した内容に設定する。調査は、ある意味で時間との勝負でもある。大切な事は、受講生が興味を持って取り組み、自らの能力を開発出来たと実感できる事にある。

6. のキーマン探しが大切なポイントの一つである。行政庁の文化課の担当者などとの打ち合わせを重ねて、調査する事の意義を伝え、協力依頼へと繋げて行く。下準備が済んで、実際的に取り組むこと

が可能であると見通せた時点で、所属する施設の施設長から、先方の行政庁の担当課宛てに、協力依頼書を発行する事となる。これは最後まで安全に調査が実施されるためにも、必要な手続きの一つである。

7. は、実際の段取りに入った段階であり、調査後の成果物を見通しておく必要がある。これは最後のまとめの段階で、欠損データや確認漏れが出ないためにも必要な確認ポイントである。

成果物としては、図面・写真・計測データ・小論文などが考えられる。そして、その結果から一つの知見を得る事。必要な道具としては、スケール・カメラ・データロガー・計測機器・ノートパソコン等がある。必要に応じて、治具などを自ら造り出す事もある。そして時間管理のための工程表を作成し、その工程管理や進捗管理を行う。

8. が調査の実施である。その項目ごとにその特性を見究めるのに必要な条件設定がある（項目ごとの調査条件をはずさない様に留意する）。物性を調べるには、一番過酷な条件下で調べるのが、一つの有効な方法である。例えば、建物の保有する温熱環境に関する特性を見極めるには、一番暑い夏の酷暑の条件下と一番寒い冬の極寒の条件下の中で調査する事が設定される。或いは補足的に、同じ厳しい条件下でのシミュレーションソフトを使った数値なども参考になる。

9. は調査後のデータのまとめであるが、これは出先での調査方法がよく考えられて準備していれば、帰って来てからのデータ入力やまとめはスムーズに行われる。現地の調査データを帳票にしてまとめておく事やノートパソコンを持参し、現地でそこに入力しながら調査を進める方法もある。次に、データロガーで集めたデータの集計とグラフ作成等、データの特性を捉える。ここで注意しなければならない事は、特に遠方への出張調査の時や一回だけの実測調査するチャンスの時などに、設定の不具合から、すべてのデータを不揃いにする訳には行かない。それ故に、現地での調査開始時点で、データ記録が出来ている事の確認は必要である。

10. の成果物に関しては、事前の打ち合わせによる調査の実施であり、途中での変更は難しいが、項

目を追加することなどは一部可能であるが、全体のデータが不揃いにならない様に配慮する必要がある。図面・写真・データ分析や考察・結果のまとめ等がある。要は、充分なる準備が必要であり、段取り七分であり、思い付きでの変更は避けて頂きたい。

11. 関係先との連絡を取る。この時点で必要な連絡は、中間時点での確認となる。全体の流れの中で順調に推移している事の確認にもなり、心掛けたい姿勢の一つであると考えている。

12. 発表会への参加。学会・大学校紀要・図書館への納本・シンポジウム等の機会がある。これは専門課程では、総合制作実習の発表会となる。もし間に合えば、12月時点での中間発表なども加えると、より具体的な取り組み内容とする手立てとなる。

指導員の方の立場としては、学会等への原稿提出並びに発表となる。何事によらず、第三者の方々の前で発表する事は、色々な角度からの意見を聞く機会ともなり、有効であると考ええる。そして、何年に一度位の間隔で、国際会議などへの原稿提出並びに発表の機会を得る事も、色々な知見を得るためにも、他の意見や考え方を知る上でも有効な機会であると考えている。

13. 必要に応じて、伝達研修を行う有効性について。これは年間予算が、段々と減額されて行く時に、実習生にとって有効な総合制作実習の機会を提供するためには、一つの課題について複数年に亘って取り組む事も有効な方法となる場合がある。これは単年度で終わる取り組みでは無く、何年間も掛けて取り組み、その成果を次の実習生に受け取ってもらう考え方である。次年度へのつなぎ、卒研実習のreadiness向上等が考えられる。卒業の前年の12月位に卒研生候補が決まって居れば、卒研生から卒研生候補者への伝達研修も可能となる場合がある。

筆者も、複数年に亘って取り組んだ課題としては、自然エネルギー利用のソーラーモデル棟、歴史的建造物の調査などが有る。

研究室の課題設定の方法としては、一つの課題を皆で取り組む方法もあるが、二つ位の課題を設定して、勿論それぞれが自分の課題に対して責任を持って取り組むのであるが、他の課題に対しても、余力

があれば調査協力に参加する機会を提供する。これは、いまだ経験の少ない実習生にとっては、新しい一つの体験の機会となり、皆興味を持って取り組んでくれた様に受け止めている。

4. 事例研究

次に、幾つかの事例を紹介しながら、具体的に考察を加えて行く。

4.1 桐生の織物工場保存建築物調査

この物件調査の取り組みは、卒研生の出身校の教員の方が、歴史的保存建築物の図面起こしを実施して、建物の登録文化財指定を得ると言う取り組みをされて居られた事によっている。

我々の卒研チームは、最初にこの歴史的保存建築物の図面起こしを手伝うと言う形で参加した。先方へのヒアリングを行い、関連する文献検索を行い、資料の読み合わせも実施した。

この間に、建屋のオーナーさんとも連絡を取りながら、調査協力への御意向を確認しながら進めて行った。

その図面起こし作業が一応の完成を見た時点で、我々のテーマである歴史的保存建築物としての環境調査を開始した。

成果物としては、先の図面や建物としての温熱環境の調査データや実測からの報告書などが予定されている (rf. 文献4. 参照)。

調査実施にあたっては、予め帳票を準備し、風速・照度・温湿度計・放射温度計・デジタルカメラ・データロガー・ノートパソコン等を準備し、現地に運び込んだ。



写真1：鋸屋根建屋（撮影角本）

これは木骨煉瓦造の建屋である登録文化財申請のための図面起こし作業に協力した



写真2：蔵造り建屋（撮影角本）

ここの温熱環境も調査した、蔵の耐火性能に加えて断熱性能も一定程度備えている



写真3：織物工場内部（撮影角本）

これは織物工場内部の様子、時代の流れの影響を受けて様変わりして行く様子を留めている

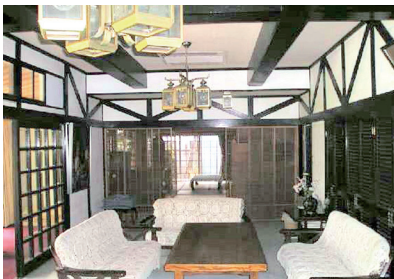


写真4：母屋内部（撮影角本）

工場と蔵造りの間にある母屋内部、古き良きレトロな雰囲気が漂っている空間、ここの温熱環境も測定した



写真5：実測風景（撮影角本）

右が工場側のレンガ壁、左が母屋側との間にある廊下部分、温熱環境の実測風景、高さを決めて温湿度・照度・気流速等を2時間ごとに計測した

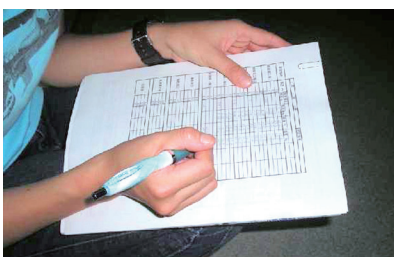


写真6：帳票記入（撮影角本）

実測現場では計測データを帳票に記入して行く、其々の役割分担作業である

現地でのデータは、データロガーに記録されると共に、デジタルカメラにも記録され、現地でノートパソコンにも記録保存して行った。

調査対象地は北関東であり、比較的にアクセスも容易であり、夏の実測と冬の実測の両方が可能となった。

途中で、折からの繊維業界不況のあおりを受けて、オーナーさんが変わり、新しいオーナーの方が歴史的保存建物の中でパン工房を始めると言う形で、この登録文化財が使われる事となった。この方との連絡も取りながら、調査を終える事が出来た。お店の開店時期の関係の中で、夏の調査と同様に、冬の調査も実施出来た事は、新しいオーナーさんの御理解のお蔭であった。これも感謝に値する事。

調査データをまとめて、新しい知見を得て、その根拠や裏付けを得て、客観的に理論を構築し、卒研発表会へと臨んだ。

この時の実習生は、専門課程の上の応用課程へと進学したので、卒研の発表後の時間を伝達研修に協力的に割いてくれた。

4.2 歴史的民家の建屋調査

幾つかの民家の例を、以下に紹介する。

4.2.1 白川郷合掌づくり

このテーマの設定は、筆者が日本建築学会の北陸（金沢）大会の折りに、途中、この世界遺産を訪れて、この家屋のオーナーさんから保存秘話を伺い、感銘を受けた事に始まる。その経緯を卒研生に伝えて、テーマ設定への賛意を得る事が出来た。

調査依頼のために、改めてオーナーさんへ協力依頼の手紙を差上げた所、まずは村の教育委員会の許可を取って欲しいとの事であった。教育委員会とのやり取りの中で、どの様な調査内容をどの様な方法で実施するのかを事前に知らせる事。そして調査実施後は、その内容を報告書の形で提出する事が、調査許可条件として義務付けられたので、その御指示に従った。

関連の文献を事前に確認した上で、卒研生と共に実測調査の準備に入った。



写真7：拌み部分
(撮影角本)

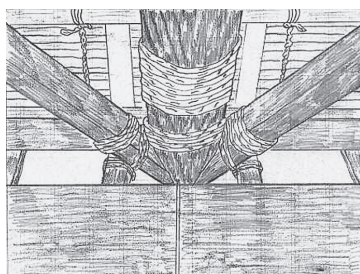


図1：又首尻の納まり
(図角本)

今回の調査地点は遠方でもあり、夏と冬の二回の調査実施は、費用面から無理なので、テーマを「合掌造りにおける夏の防暑効果」に絞った。

調査レベルに関しては、機会ごとに助言を加える事で実施可能な内容であると判断した。

調査家屋が我々卒研チームの宿泊先でもあり、夜にはこれ等の合掌造りの改修を手掛けている渡りの大工さんのお話を伺う事も出来た。

成果物としては、作成図面・写真データ・気流データ・温湿度データ・データロガーの記録データがあり、これ等をまとめた報告書の作成であった。この作成した一冊を教育委員会へ提出する事が、調査許可条件の一つとなっており、これを実行した。新しい知見として受け止められた事は良かった。

最後に、卒研発表に臨んだ。皆、実感を持って作り上げた研究成果であるので、自信を持って発表する事が出来ていた。

このチームも何人かは、先の応用課程への進学者であったので、次の学年への伝達研修には協力を得る事が出来た。

4.2.2 保存民家（網島邸）

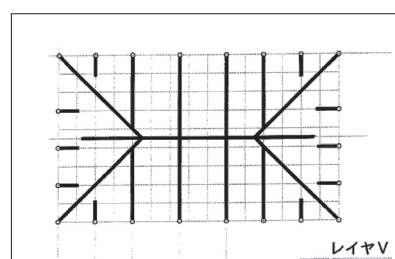
この課題設定としては、保存民家を対象としたものである。この建屋の管理は、東京都が行っている。当該課と連絡を取り、調査協力を依頼し、図面入手し、軸組み理解と1/10縮尺の模型を製作し、民家の小屋組みのメカニズムを理解した。

設定レベルとしては、専門課程の学生さんには適していると考えている。成果物としては、写真データ・一部データロガーデータ・縮小模型等がある。小屋組み構成のメカニズム理解に役立てる事が出来た。

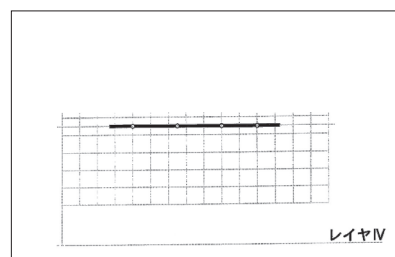
現地の建屋を訪れるとボランティアの方が、茅葺の虫駆除のために囲炉裏に薪をくべに来て居られた。夏でも、このような努力が欠かせないのである。

小屋組み理解のために軸組レイヤーを作成した。

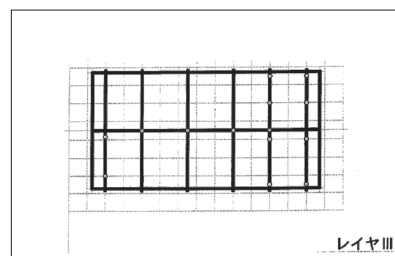
下から、レイヤーⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴと重ねてイメージする事によって、全体的小屋組み構成がイメージ出来る事となる。複雑な民家の小屋組み構成を、各層に分解して、説明図としたものである。



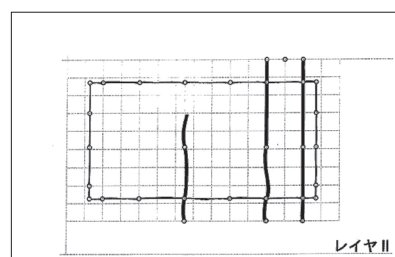
レイヤーⅤ



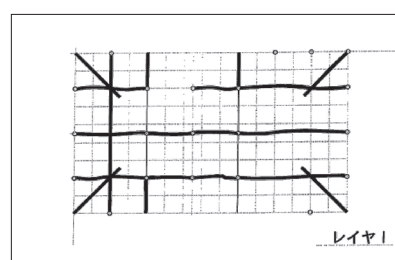
レイヤーⅣ



レイヤーⅢ



レイヤーⅡ



レイヤーⅠ

図2：小屋組みレイヤーⅠ～Ⅴ

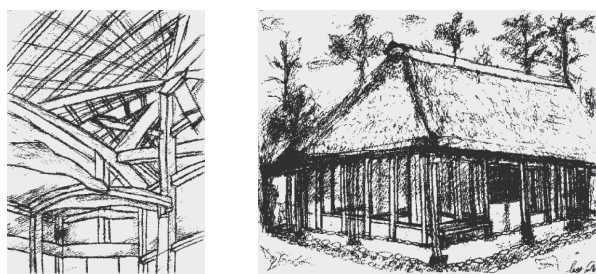


図3:建屋スケッチ(内部小屋組み&外観)(図実習生成成)

4.3 震災関係

このテーマの設定に関しては、日本の国がおかれている宿命的な地理的条件があり、その中で建築づくりやものづくりに取り組んで行く姿勢が必要である。日本に於ける建築の将来を考える時に、自然災害や地震災害の多い国として、此の立地条件下での日本の国づくりを考える必要性を痛感している。

問い合わせ窓口としては、千葉県旭市の当該課があり、訪問し調査協力をお願いし、仮設住宅の基本図面の入手をお願いした。打ち合わせさせて頂いた職員の方々は、若い学生さん達のために、お忙しい中笑顔で時間を割いて下さった事は、感謝に値する事と受け止めている。

関連文献に関しては、日本建築学会における取り組み事例があり、これ等を参考とした。

調査レベルとしては、より実務的内容でもあり、readiness状態としては、一通りの建築的理解が備わっている必要があるので、専門課程の卒研生の場合には、指導員の側でも良くフォローして行く必要がある。

成果物としては、仮設住宅の図面・図面を基に起こしたエスキース模型・写真データ・気流速計データ・温湿度計データ・データロガーデータ・相談員の方々に伺ったヒアリング内容等がある。

計測用道具を準備して、実測調査用の工程表も作成した。

4.3.1 東日本大震災仮設住宅の住環境調査

これは東日本大震災後の仮設住宅の住環境調査の実習に関する報告である。日本の度重なる震災等の自然災害後の仮設住宅や復興計画に関する報告内容である。

テーマ設定としては、東日本大震災仮設住宅の住環境調査としている。この調査地に関しては、車で2時間位の距離に位置していたので、夏と冬の測定調査が可能であった。データとしては、先の測定結果に加えて、solmetricと言うソフトを使って、その敷地における太陽光発電量予測なども実施している。

これはその土地での南中時刻がわかれば、どこの土地に出かけて行っても実施出来る方法である。

成果物としては、建物内の気流速・温湿度・デー

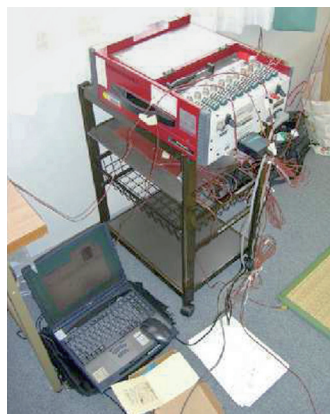


写真8：データロガー記録計

集会室に設置されたデータロガー記録計、10接点の温熱を5分刻みで記録している、データはノートパソコンに記録される



写真9：建屋内実測風景

建屋内実測の様子、協同作業で行うので役割分担やチームワーク形成能力が必要とされる



写真10：建屋軸線計測作業

これは天文台に現地の季節・月日に於ける南中時刻を聞いておいて、その時の影をプロットして、建屋の軸線を求めるための作業である

タロガーの記録値・建物表面の温度・建物外部の照度・気流速・温湿度等の記録値、図面、写真データ、太陽光発電予測値等があり、報告書にまとめられている。

仮設住宅の実測調査の中から理解された大きな項目は、住宅や集会室の換気性能が不十分であると言う事である。集会室では、寒い冬の日でも多くの人が集う時には、玄関ドアを少し開放する事で不十分な換気の補助としていた。もう一つは、集会室などでのイベント計画が大切であると言う事。これは人々が集うためには、様々なイベントを開催する必要がある事。生活空間ではあるが、生活の中には精神的な潤いや充実感も必要とされるのである。

これ等の被災後の記録が留められた事の意義は、大きいと受け止めている。

関係先としては、先の旭市の方々のみならず、現地の仮設住宅で生活して居られる連絡員さんの方とも連絡を取りながら、現地調査に協力して頂いた。又、福祉のケアで定期的に訪問されて居られる相談員の方々の御意見もヒアリングさせて頂いた。これも感謝に値する事。

そして迎えた発表会の時である。夏と冬の現地調査の結果をまとめ上げる段階で、全体としての捉え方などをフォローしながら、まとめて行き発表した。伝達研修の目的のため、報告書を作成した(rf. 文献6. 参照)。

4.3.2 東北仮設見学

これは日本建築学会の高齢者・障がい者居住環境小委員会主催の見学会からの報告内容である。委員会として、現地のキーマンの方々とのアポイントも取っており、仮設住宅の中での高齢者や障がい者の



写真11：集会室部分外観

これは集会室と言う共用部分での様子である、仮設の生活の中にも潤いのある生活としたい

方々への配慮がなされた仮設住宅の様子を見学調査し、ヒアリングさせて頂いた。見学調査の成果は、小論文として学会等の機会に、発表させて頂いた(rf. 文献6. 参照)。仮設住宅に於いても高齢者や障がい者の方々への配慮がなされている事は、日本の恵まれた姿の一つであると感じた次第である。

4.3.3 東北復興計画案

この課題設定は、陸前高田市が当時復興計画案の敷地候補をホームページ上にアップしており、その敷地条件に対して自然エネルギー利用の復興計画案を立案したものである。日本建築学会のシンポジウム等で発表させて頂いた(rf. 文献7. 参照)。

4.3.4 メモリアル計画案

これは陸前高田市が、メモリアルホールの立案について、広く市民からの意見を募集しており、それに対して知人の中学校教員の彼と立案したものである。筆者は、設計協力の形で参加している。卒研究生は、その立案に関する模型造りの形で参加している(rf. 文献8. 参照)。



図4：復興計画案（高田・今泉地区）

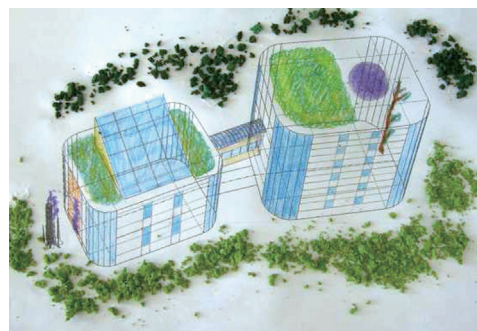


図5：希望の松メモリアルホート & 希望の松ミュージアム復興計画案（設計角本）

5. フィールド調査からの成果

フィールド調査を実施する事によって、窓口担当者とのコミュニケーション能力の育成、調査準備への段取りの取り方、計測機器の使用法の習得、集計したデータの解析手法の習得、フィールド調査はチーム編成して実施するので、チームで協同作業する事の大切さを学ぶ。現況分析能力の習得、まとめた報告内容の発表能力の習得、フィールド調査から得られた知見によって、そこからの見通しを立てる目が養われる、理論構築への根拠を得る。これ等の教育的効果が期待され得ると考える。

6. まとめ

ここまでフィールド調査と言う形での色々な事例を紹介し、その考え方を述べて来た。中でも防災・減災に関する取り組みは、すべてのものづくりに関係する学科での実習課題に成り得る内容であり、この点での取り組みを開始し、その知見を開示して頂きたいと考える次第である。

日本の立地条件に於ける地震災害を初めとする自然災害に関する防災・減災への取り組みを、それ等を自らの宿命的な課題として真に取り組んで行かない限り、日本の将来は見えて来ない (rf. 文献5. 参照)。これ等の諸条件を確率論的要素としてのみ扱っている間は、日本の将来は見えて来ないので有る。伝統的建物も規制対象からは外される訳であるが、それは取りも直さず災害弱者の立場に立つ事を意味している。少なく共、研究に励み、そこに自助努力



写真12: 卒研発表の様子 (撮影角本)

伝える能力を養う、タイトル発表、中間発表、最終発表と頭の中のデータは、一つにまとめ上げられて行く

を促す形での時代的進歩を取り入れて行く姿勢が強く望まれる。

具体的にはシラバス作成時点に於いて、基本的には標準に準じた内容であるが、そこに新しい知見を入れて行く余地を設定し、各教育者が日頃から新しく取り組んでいる内容からの知見を開示して行く可能性を求められるのである。その目的のために各教育担当者は、新しい時代の動きや課題への取り組みに関して、新しい情報を探しに行くばかりでは無く、自らに新しい情報が入って来るネットワークの構築を図り、日頃からの実践的取り組み姿勢を持ち合わせている心構えと努力とが問われているのである。

7. 補足説明として

理解を深めるべく、以下に、補足説明を加えたい。

・補足説明1:

筆者自らも学生時代に、東京下町のフィールド調査を実施した事がある。

これは折から環境問題が注目され始めた1970年頃であり、生活環境を調査する手法として生活環境指標なる考え方があった。

関係の資料を貰いに関係省庁に足を運んだり、国民生活センターに足を運び、参考意見を伺ったりした。

この生活環境指標に従って、東京下町地区を他学生に協力してもらいながら、パネルにまとめた。当時の学園祭などで、調査結果を発表した。

当時は、学会の準会員レベルであったので、学会発表の機会は与えられなかったが、一つまとめ上げると言う意志行為が大切であると考える。

・補足説明2:

フィールド調査と言うと東大の原広司研究室が、海外の集合住宅の調査などを実施したものなどが、当時雑誌などで発表されていた。

もう一つ、明大の神代雄一郎研究室のデザインサーベイも一つの手法として特筆されるものがあった。

これは漁村など、或る特徴を有する集落を、一夏

掛けて調査するものであり、その建物の形や位置関係や、その空間構成を調べる。

特に、神代氏のお話を伺うと、“その人間関係は、祭りの時などに浮き彫りになりますね。”との事であった。

これは今の東京や地方の街組でも同じである。

学会の防災に関する特別委員会にも参加させて頂き、東京都の防災に関する取り組みについてヒアリングに出かけ、資料も入手し、東京都主催のシンポジウムにも参加し、その内容を学会の特別委員会の席でも発表し、後日、共著で本（rf. 文献2. 参照）も出版させて頂いた。

学会の比較居住文化に関する委員会のメンバーの中には、東南アジアの特徴ある街組を継続的に調査している方々も居られる。

これなども文化人類学の比較文化論の立場から、現代社会における歪みを発見するためにも、有効な方法論の一つであると考えられる。

・補足説明3：

今日的課題として、日本の国づくりとの関連で課題設定する場合に、一つのヒントとなるのは、「防災・減災」の観点であり、そのための技術的なツール開発である。

フィールド調査の中でもふれている様に、今の世の中の様態を調査する一環として、情報収集があり、そして或る知見に到達した時点での情報発信とがある。日本の最高の英知としての日本学術会議があり、色々なシンポジウムを開催しているので、参加してみるのも良い。

今回、日本の防災に関する継続的な取り組みのために、防災学術連携体～防災減災・災害復興に関する学術ネットワーク（2016年1月9日設立）があり、多くの学会が参加している。

そこの方向性を合わせる分野で、卒研テーマとしての課題設定をする事も有効な手段の一つであると考える。

次世代を担う若者が、日本の将来の国づくりのために働く事を目指し、それによって世界の国々のためにも貢献して行く事が望まれる。そしてそこに、

職業能力開発施設が担うべき、能力開発施設としての課題が見えて来ると考える次第である。

***ここに実習生を初めとする実習調査に協力を惜しまなかった関係各位の方々の御理解と御協力に対して、また保存建屋の実測調査や震災後仮設住宅の実測調査に御協力下さった方々に対して、心からの感謝を申し上げる次第。

<参考文献>

1. 角本邦久：「フィールドへ出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク」（共著、日本建築学会編）、発行：風響社、2012年3月
2. 角本邦久：「地震リスク評価とリスクコミュニケーション」（共著）、（社）日本建築学会、2011年6月
3. 角本邦久：「フィールド調査の始め方、～茶室・民家・合掌造り・蔵造りの調査より～」、第955回東京雑学大学講演発表、2015年7月
4. 角本邦久：「桐生市における近代化遺産建築物の調査、～近代化建築物の温熱環境の測定及びそれに基づく改善提案～」、平成19年度総合制作実習卒業研究論文、（その1）～（その4）、指導・監修、関東職業能力開発大学校、2008年3月、（国会図書館蔵）
5. 角本邦久：「東日本大震災後の日本の国造りへの指針」、（その1）～（その3）、2012年度日本建築学会、関東支部研究報告会、於：建築会館、（社）日本建築学会、2013年3月
6. 角本邦久：「東日本大震災後の仮設住宅の現状と今後への展望、～高齢者・障がい者用仮設住宅の報告～」、紀要第17号、関東職業能力開発大学校附属千葉職業能力開発短期大学校、2012年10月
7. 角本邦久：「東日本大震災の復興計画提案として～環境配慮型ソーラーコミュニティ論の展開～」、オーガナイズドセッション：環境に配慮したまちづくり、（社）日本建築学会（東海）大会、名古屋大学、2012年9月
8. 角本邦久、共著：「希望の松メモリアルホール」と「希望の松ミュージアム」（『希望の松スクエア』）について、2013年1月、（国会図書館蔵）